「日本の美術表現にみる蛇：祝您蛇年快楽」『あいだ』200号（連載第93回）2013年2月20日 17-23頁

あいだのすみっこ不定期漫遊連載　第93回

日本の美術表現にみる蛇
祝您蛇年快楽*

稲賀 繁美（いなが　しげみ／国際日本文化研究センター，総合研究大学院大学）

日本列島における蛇の造形を考えるには，伝播論か原型論かの議論を踏まえて，おおよそ三つの局面に分ける必要があるだろう。最初は陰陽五行説が伝播する以前の造形。具体的には縄文土器の時代から土偶の描写，さらには神道の儀礼に関連する造形が問題となる。つづいて十二支の思弁のなかでの蛇の位置づけ。ここで平行して，中国起源の龍や，インド起源のナーガ蛇との混交が検討されよう。「土着」の神道も，抽象概念は仏教から，宇宙論は易経から汲んでいるからだ。龍と蛇とをいかに弁別するかは，図像のうえではけっして簡単ではない。八卦に則れば，辰巳はともに巽（ソン），方角としては南東であり，象徴的記号論のうえでも弁別しにくい。第三には，こうした思想史的枠組みが出揃ったうえで，蛇の描写が世俗化とともにいかなる変容を遂げたかを見たい。具体的には，とりわけ江戸時代後半の想像力が問題となる。伝奇的な文学への挿絵に起源をもつ造形が多いが，そこには同時に欧州原産の舶来の蛇の図像が流入する。

旧暦新年の末年を祝うに当たり，以下，日本といっても，絵画と造形表現に焦点をあて，民俗や文学に関係する話題は極力排除する。とはいえ，それらに共通の根を指摘することは，論述のうえで避けられない。さらに，蛇の造形を追跡する場合には，東南アジアから東北アジアにいたる地域との関連だけでなく，直接には関連をもたない古代地中海圏との対比や，さらには西洋世界での蛇の扱いとの比較が不可欠となる。

縄文土器の蛇，埴輪の蛇，そして注連縄

安道寺遺跡出土の有孔鍔付土器を見よう。壺の湾曲部中央にとぐろを巻いた蛇が造形され，そこから鎌首を持ち上げた頭部が浅浮き彫りで描かれている。縄文時代中期にはとりわけ蛇の造形が多く知られる。上山田・天神山様式の縄文土器（富山県埋蔵文化財センター）には，口縁部に縄目の文様が彫られているものが頻出するが，そこにはあきらかに蛇の頭部を見分けることができる。土器の胴体の部分にも，あるいはうねり，あるいは渦を巻き，あるいはＳの字を描いた文様が，粘土を盛り上げて縦横に施されている。そのすべてを蛇と決めつけるのは無理としても，もつれ結ぶ螺旋の運動から生命が誕生する様を，もっとも直裁に映像

図1　<有孔鍔付土器>　安道寺遺跡　縄文中期　山梨県考古博物館

図2　<蛇体把手付深鉢>　長野県尖石遺跡　縄文中期
茅野市尖石考古館

として伝えるのが，蛇の交合であることは疑いあるまい。『蛇』(1978) の著者，吉野裕子（1916-2008）は，蛇の頭部の形態がなによりも男根を連想させることを強調し，「縄文土器の蛇が躍動するのは，蛇によって象徴される縄文人の性に対する情念の表現にほかならない」からだと断言する。

土器から土偶に移る。長野県藤内16号住居址からは，これも縄文中期前半の，頭部に蛇を乗せた土偶が発見されている。髪を結った状態とも見えるが，その束の先端にはふたつの鎌首がみえ，蛇を女性の頭部に載せるなんらかの儀礼が存在したものと推定される。さらに時代を下り，古墳時代の埴輪を見よう。群馬県箕郷町上芝古墳から出土した埴輪の巫女は，連続三角紋のタスキ，帯，裳などを身に着けている。台湾のパラワン族の「針磨き」ほかにも，とぐろを巻く蛇が同様の三角紋による彫刻で表現されている。先述の吉野裕子は，このことから類推し，日本の埴輪の巫女も，元来は蛇を纏っていたもの，と推測する。

頭髪が蛇からできた怪物といえば，ギリシア神話のメドゥーサのことが連想される。さらに環境考古学者の安田喜憲は『蛇と十字架』(1994) で，古代ギリシアに先行するミノア文明に言及する。地中海クレタの新宮殿時代（紀元前1700-1450年頃）のクノッソス宮殿からは，蛇を胸や肩にめぐらした大地母神，あるいは両手で小型の蛇を２匹掴んで腕を広げる大地母神の像が出土している。イラクリオンの考古学博物館の名品だが，新宮殿の建築群の跡から，中空の柱の側面に臼状の容器が三つほど突き出た奇妙な遺物が見つかっている。おそらくは蛇を餌付けするための道具だったと推定され，ここからも蛇信仰の存在が裏付けられる。パルテノン神殿に祭られた女神アテネはメドゥーサの盾を手にしている。またディオニソスの大祭で乱舞する女性の巫女マイナデスが蛇に憑依したこともよく知られる。さらに医学の神として尊崇されるアスクレピオスの杖に二匹の蛇が絡まりあっているのも有名だ。古代エーゲ海世界におけるこうした蛇信仰の遍在は何を意味するのだろうか。かつて森林時代のパルテンノン神殿の破風には巨大な大蛇が飾られていたが，極東の日本にあって，神道の神社でこれに対応するのが，ほかならぬ，注連縄（しめなわ）だろう。

神道の拝殿に掲げられた注連縄。そこに交合する雌雄の蛇を見る解釈は，岩田準一『鳥羽志摩の民俗』(1970) ほかが提起している。蛇の交合が縁結びと豊穣の比喩であったことは否定しがたい。出雲大社や佐多神社の竜神はとぐろを巻いた蛇であり，大和の三輪山（みわやま）は，神体である巳（み），すなわち蛇が七廻半した姿として信仰されている。さらに滋賀県東浅井郡・集福寺のオコナイの祭で正月の祝膳に据えられる花餅は，蛇の卵に酷似している。その他の例を含めて検討した吉野裕子は，鏡餅が蛇儀礼に由来するとの仮説を展開している。神社建築の原型となる高床式の掘っ立て小屋は，東南アジアに起源を求め得る。

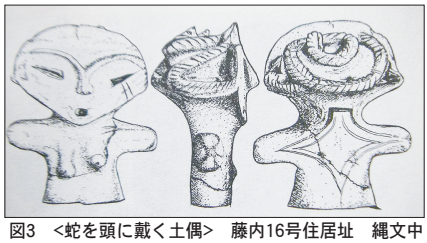

図3　<蛇を頭に戴く土偶>　藤内16号住居址　縄文中期中葉　井尻考古館

図4 <埴輪の巫女> 群馬県箕郷町　上芝古墳出土　6世紀
東京国立博物館所蔵

図5 <大地母神>　クノッソス宮殿出土、イラクリオン
Heraklion 考古学博物館

図6 <大注連縄>　出雲大社　拝殿入り口　島根県出雲市

同じ東南アジアに広がる稲作文化圏の豊穣儀礼一般と，蛇信仰の系譜とは，どのように輻輳するのだろうか。伏羲・女鍋の図像でも人面・蛇身の怪獣が尾を交える。南方のミャオ族起源と中国の混淆かとも推測され，古くは殷代に遡るらしいが，漢代の作例が残る。その一方，中国起源の聖獣としては玄武が知られる。東の青龍，南の朱雀，西の白虎に伍して北の守護を司る。亀と蛇とが合体し，あるいは亀に蛇が絡みついた図像だが，奈良県明日香村のキトラ古墳，高松塚古墳の玄室北壁に鮮明な遺品が発見されている。

図7 <玄武>　キトラ古墳　7世紀末-8世紀はじめ　奈良県明日香村

陰陽五行説，仏典偽典から能面へ

仏教伝来（538年）とともに龍が普及し，平安時代（8世紀末-12世紀末）以降には蛇の図像とも混淆する。やがてそこには仏教の女人禁忌が色濃く影を落とすようになる。仏教以前には，蛇は性的な信仰と結びついて，多産・豊穣あるいは脱皮による再生を司り，神秘な神性を発揮していた。ところがその同じ蛇は，仏教の定着とともに，邪悪な怨念に支配された女性の罪障を具現する存在へと変質を遂げる。ここでは話題を造形美術表現に絞るとしたが，室町期（14世紀-16世紀）に成立した謡曲にも蛇が登場することを見逃すわけにはいかない。もっとも著名な例は，「道成寺」。舞台の後半で役者が鐘から出てくる場面でつける面は「蛇」と呼ばれる。馬場あき子『鬼の研究』(1971)によれば，般若の面が「半蛇」とも称されるのに対して，「蛇」は「本成」であり，恋慕の情念の激しい炎によって，釣鐘のなかの男を焼き殺した蛇の本性を現したものとされる。衣装にも「鱗型」とよばれる三角形の連続文様が選ばれるが，これは蛇の鱗の意匠だとされる。

「道成寺」説話の起源は『大日本国法華験記』巻下第百二十九にみえる「紀伊国牟婁郡悪女」，また『今昔物語集』巻第十四第三「紀伊ノ国道成寺ノ僧写法華救蛇語」に求められる。醍醐天皇の治世の出来事（西暦926年頃）とされ，土佐光重による『道成寺縁起絵巻』の図像が著名だが，焼き殺される美男の僧侶には『元亨釈書』で「安珍」の名が与えられ，恋情に狂う蛇には操浄瑠璃『道成寺現在蛇鱗』（寛保2=1742年）が「清姫」の名を授け，以降説話は「安珍・清姫」伝説として流布する。妖怪画で著名な鳥山石燕（1712-88）の『今昔百鬼拾遺』にも「道成寺鐘」の図がある。義太夫節では「日高川」の舞で知られ，浮世絵にも楊洲周延に《竹のひと節・日高川》，近代になっても小林古径の日本画《日高川》ほかへと受け継がれる。

法然の『無量寿経釈』からも窺われるように，高野山，比叡山，崇福寺，金峰寺，醍醐寺などいずれも女人禁制であったなか，ただ熊野だけが女性の巡礼を受け入れていた。「道成寺」説話が熊野古道に沿った土地を起源とすることも熊野への女人参詣と無縁ではない。室町時代後期から近世前期にかけては，熊野比丘尼と呼ばれる遊行の女性宗教者たちが，地獄極楽の絵解きをして勧進に勤しんだことが知られる。彼女たちが利用した掛図は『熊野観心十界図』と呼ばれるが，その地獄図は古代以来の『往生要集』などとは違い，偽経『十王経』や

図8 <蛇> 能楽面　謡曲「道成寺」（室町時代後期に成立）に用いる

図9 （伝）土佐光重　『道成寺縁起絵巻』　15世紀初頭

図10　<両婦地獄>『十界図』（部分）禅林寺本　16世紀

日本で作成された『仏説地蔵菩薩発心因縁十王経』あるいは,『血盆経』などの偽経の流行を背景として製作された，いわば「女性専用」の絵図であった。そこで蛇の図像としてとりわけ注目をひくのが「両婦地獄」。一人の男に懸想する二人の女が蛇に化して纏わりつく。二匹の蛇女に絡みつかれた男は，縄なす蛇に胴と腕とをぐるぐる巻きに縛り上げられ，捕縛されて押し置きを受ける悪人同然の姿であり，その顔を二匹の蛇女の舌が嫉妬の炎で苛んでいる。その傍らでは，経血の「穢れ」を戒める『血盆経』に由来する「血の池地獄」の図にも，同じように蛇と化した女性が何人も溺れている。

浮世絵のなかの蛇

こうした中世の女地獄図に注目したのが，江戸時代の戯作者として知られる山東京伝

図11葛飾北斎　<しうねん（執念）>『百物語』1830年完結

(1761-1816) であった。京伝は浮世絵師としては北尾政演としても知られ，狂歌連としても名を残す。当時，戯作者と浮世絵・絵師とは密接に分業して絵本の仕事を進めていた。同時代人でもあった葛飾北斎 (1760-1840) には『百物語』(1830) に収めた《しうねん》(執念) が知られる。描かれているのは位牌に取り付く青大将。高田衛が『女と蛇』(1999) に引いた中村幸彦の表現を借りるならば，中世において聖性を喪失した「蛇」は，悪場所を中心にして近世に強く受け継がれ，「自然的転質」を遂げた。《しうねん》は，「蛇神の最も根源的な位置が，死者の守護，黄泉国の守護神であった」ことを，その世俗的な表現のうちに復活させて見せてくれる。

京伝や北斎より数歳年上には歌麿 (1753-1806) がある。その『画本虫撰』(1888)には鈴虫や蟋蟀（コオロギ）などの昆虫とともに蜥蜴（トカゲ）や蛇が描かれている。北斎は柳亭種彦の処女作となる読本『霜夜星』(1807) に挿絵をつけているが，その蛇はあきらかに歌麿を意識している。歌麿が蜥蜴を狙う青大将を，蘭癖ある博物学者も顔負けの描写力で描いたなら，北斎は蛙を呑もうとする山案山子を誇張して描く。連続三角紋が特徴的な蛇がわざわざ選ばれているが，この蛇は勧次に懸想するお沢の怨念が変じたもので，悪知恵を働かせた男を恨んでの所業と知れる。とりわけ19世紀にはいると，写実的ならばこそかえって超自然さを印象づける怪異を，まざまざと目の前に浮かび上がらせる挿絵が，木版を駆使して驚異的な細密さで複製されるようになる。戯作者も絵師の力量に

図12　喜多川歌麿　『画本虫撰』より　「蛇と蜥蜴」

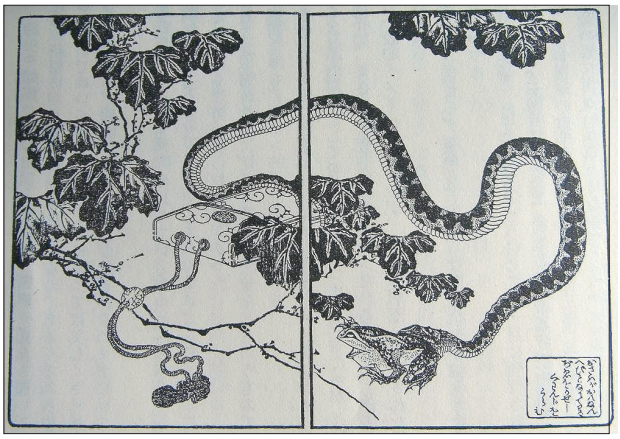

図13　葛飾北斎　霜夜星　挿絵『お沢が怨念蛇となって悪知恵犯せし勧次を恨む』

恃んで，実録に脚色をほどこした怪談を紡ぎだす。そもそも蛇は神話時代このかた禁忌を秘めた存在だったが，それだけに禁忌として隠された世界を呼び覚ますには，蛇は恰好の主題となった。文化５年（1808）には「蛇など身体手足に巻く」趣向を禁じるお触れが，書肆や問屋を介して戯作者たちの手元に届けられた。ここからも，蛇を描く読み本がいかなる脅威となりえたものか推測される。

その禁令直前の作品に，滝沢馬琴の『勧善常世物語』がある（初版刊記は1805年）。美貌の悪役，源藤太は，因果応報の末，蛇によって苛まれる。あるとき源藤太は，首の窪みを虫に刺される。その傷跡が腫れて化膿する。治らないので合わせ鏡でみると，傷口には小さな蛇が巣食っている。取り除こうとするのだが，どうやら蛇は脳髄のあたりに潜んでしまい，頃を見計らって現われると，顔を舐める。やがて蛇は広がった傷を舐めるばかりか，膿血を吸い尽くし，瘡もろとも男の顔の肉を侵しはじめる。ついには男の首に何重にも絡まった蛇は，藤太を呼吸困難に陥れるばかりか，その頭蓋に噛み付き，左の眼を抉り出し，右の眼をも喰らおうというところで，ようやく藤太は息絶える。おそらくは進行性の梅毒の描写だろうが，この凄惨な場面を描いた画工は蹄斎北馬。教訓話を口実として酸鼻な残虐趣味を展開する趣向といってよい。蛇が髑髏に棲みつく意匠は欧州にもみられる怪奇趣味だが，北斎や暁斎なども図解することとなる。

図14　曲亭馬琴・作『勧善常世物語』蹄亭北馬・画
蛇が藤太の顔を食らう場面

＊２月27日に筆者は国立美術館研究所での会議「建築における交換」L'Éhanges architectural: Europe et Extrême-Orient, 1550-1950, colloque internationla, INHA, jeudi 21 et vendredi 22 février 2013参加の帰途，パリ・シャルル・ド・ゴール空港に寄ったが，免税店では「祝您蛇年快楽」として，蛇年の新年にちなむ「特殊優恵」の特売中だった。2013年1月24日-1月27日，在巴黎戴高楽机場にて開催。